岩手大学ＡＯ入試の取り組みと課題

――初の教職員合同選考による効果の検証――

永野拓矢（岩手大学）

1 はじめに

2007 年秋，岩手大学では初の AO 入試を実施した。人文社会科学部総定員のわずか 4%（9 名）と少数ながら 71 名の志願があった（7.9 倍）。東北地方では「国立大学文系学部では東北大学に次いで 2 番目の AO 入試の実施」となるなど地域的な話題性はあったがそれ以上に特筆すべき点は「事務職員も選抜（面接）に加わった」ことである。本学では初の試みだが，恐らく国立大学でも事例は少ないのではないだろうか。アメリカでは入学試験は独立した組織で専門の職員が運営するのが一般的である。日本では学部（教員）の判断となるケースが通常であり，AO 入試にしても同様である。しかしながら本学では「大半が学部卒で就職する」文系学部で始めたことから人物の多面的な評価法として「卒業後の活躍度」について教員とは違った視点を持つことに鑑みて職員面接官の積極登用に動いた。

なお，2 次選考は従来どおり学部にて組織運営されている。

2 AO 入試の発足まで

2.1 近年の岩手大学の入試事情

岩手大学は数年前から全学部（人文社会科学，教育，工，農）一般入試の志願者減が続き，現在も回復していない（5 年前の志願者から 3,912→3,480→3,018→3,047→3,087 名･･･2007 年）。この数年来，工学部や農学部では一般入試の定員割れや 2 次募集も経験した（工学部は 2 度）。学内は「志願者獲得」に向けて様々な対策を講じた。高校訪問の強化，出前講義の実施，学内では就職支援などを行い，さらに平成 18 年度から入試専任の教員を公募で採用し，志願者の確保と向上に取り組んでいる。

岩手大学は少子化が懸念されながらも合格者の地元占有率が 44%と「地元で人気が高い大学」である[1]。さらに東北地方出身者の占有率は 87%に迫る（いずれも 2007 年度合格者）など，まだまだ困窮の立場ではない。しかしながら，今後の 10 年で東北地方の 18 歳人口は 20%程度減少する[2]ことに鑑みれば「地元に強い」だけではやがて定員割れが常態化するか，履修困難な低学力層が増加することが予測される。まだ“余裕”ある現在のうちに（“余裕”という言葉には，多少の“虚勢”も含まれるが）「全国区」に名乗りを上げておきたい。そういった中で広報性が高いことと，「本学入学生にはやや不足がちな活気と積極性のある人物を全国から募集できる」メリットを感じ，AO 入試実施の検討に入った。

2.2 AO 入試発足

AO 入試の立ち上げは新任の入試部門専任教員が調査･企画･運営を担うことになった。先行事例を求めて 2006 年 5 月に山口大，広島大，鳥取大の訪問，さらに 10、11 月にかけては筑波大や静岡大にて AO 入試に関する情報や運営についての指導を仰いだ。学内では全学部にアプローチして具体案を持参して入試委員会から各講座単位まで足を運んだ。その結果，曲折はあったものの人文社会科学部にて実施することとなった（表 1）。

表1 岩手大学人文社会科学部AO入試概要

募集人員	9名（学部定員215名の約4%）
出願期間	2007年8月21日～27日
1次選考	9月9日～12日 （岩手大学・東京・札幌にて実施）
2次選考	9月29日（岩手大学）
合格発表	10月12日
合格者オリエンテーション	10月28日

2.3 アドミッショングループ

本学ではアドミッションセンターなる部署は確立されていない。大学教育総合センターがその一部を担う形で入試部門が置かれているが，各分野（全学共通教育，教育評価・改善，専門教育関係連絡，就職ほか）それぞれの受け持ちがあるため入試は専任教員1名とセンター長（学務担当副学長）が関わる形態となっている。そのセンター長，専任教員と，AO入試を行う学部から兼務教員を2名，さらに学務部部長と同部入試課職員4名を含めたAO入試に係る組織として「アドミッショングループ（以下AG)」を立ち上げ毎月AG会議を実施している。また，これとは別にAO入試に関わる学部で「AO入試に係る学部ワーキング・グループ（以下AOWG)」が組織され，運営から実施体制までAGと連携を取りながら業務を遂行した（表2)。

表2 岩手大学AO入試の組織

アドミッショングループ	人文社会科学部AO入試ワーキング・グループ
副学長（学務担当） ★入試部門専任教員 ★学部兼務教員（2名） 学務部部長 入試課課長，主査，主事 など9名	学部長 各課程AO入試担当教員（4名） ★学部兼務教員（2名） ★入試部門専任教員 学部担当職員，AG職員 など12名

（★は両組織を兼務）

2.4 組織と運営

AG組織は9名だが，今後は新規の学部でAO入試が開設されるとさらに数名ずつ兼務教員が増員される予定である。日頃の活動は主に入試専任教員が高校訪問（年間200校程度）や大学説明会（岩手大学単独開催から業者主催の説明会参加まで）など積極的に展開し，AO入試告知期間の短さを補った。今後はAO生の入学前教育や入学後のフォローなどにも関わることにしている。

3. AO入試実施

3.1 1次選考は「要約・実績・アピール」

AO入試1次選考は地元岩手大学で2日間，東京，札幌で各1日実施した。上記の通り事務職員も含めたアドミッショングループにて書類評価や面接などの選考が行われた。文書要約の時間を含めて一人あたり30分程度の短い時間で70名が受験に臨んでいる（1名欠席)。およそ定員の3倍程度を1次通過としたが（26名)，志願者の「実力」が高く，高い評価レベルでの選考に選考者を大いに悩ませた。

3.2 2次選考「平均6時間の長時間選考」

AO入試2次選考は9月29日（土）に岩手大学にて実施された（受験率100%)。選考内容は各課程で異なり，小論文や集団討論，ディスカッション，30分を超す個人面接などを行ったが，いずれも課程で求める人物像に沿った選考内容であった。各課程9時から一斉に開始されたが，終了時刻は異なり，中には昼食を挟み，終了が17時を過ぎた受験生もいた。

3.3 教職員の選考評価についての考察

選考後、各自結果を集計した教職員間の評価の差は予想より小さく、それは通常入試において教員間で生じている程度に収まっていた。職員は初の機会のため慣れぬ面もあったが著しい差は見られなかった。むしろ教員側の方が所属学部のスタンスが抜けないためど

うしても学部選考でのイメージで評価が行われてしまうことがあった。

選考にあたり異議があればその都度会議を中断しAG教職員全員で話し合われた。「1次選考は○○学部の入試ではなく、“岩手大学AO入試の1次選考”である」ことを強調した。実質1学部のみのため徹底させることの難しさを感じた状況もあったが1次選考の主たる項目は「要約力・実績・アピール」に対する「整合性の確認と評価」である。これらは従前の本学入試に該当しない選考領域である。したがって教員の意見だけでなく職員側からの観点も重要である。慣例的に意見が分かれると職員が遠慮する傾向にあるが、教職員の分け隔てなく全員の発言を求めて選考を進めた。

こうして教職員合同の選考は上記の領域において差異がさほど見られないことが分かった（表3）。

表3　1次選考における教職員別平均点[3)]

教員A･･･108.6	教員B･･･115.5
教員C･･･116.1	教員D･･･118.4
職員A･･･119.9	職員B･･･114.7

4.　今後の課題

10月12日に最終選考結果を発表し、11名の合格者を出した（実質倍率6.4倍）。その後はオリエンテーションを実施し、入学前教育についての課題を提示し、入学まで緊張感を持続させる取り組みを行っている。

今後の課題としてはAGに関わる教職員はそれぞれの在任（担当）期間が短いことである。特に職員は数年毎で定期異動が行われるため職務自体が入試に関わらなくなる場合がある。貴重な選抜ノウハウもこうした大学全体の組織の中では効果が続かない。法人化した現在、大学職員のプロパー的な組織の構築を期待したいところである。

【注】

1)　「岩手大学入学者アンケート」から前期日程手続き者のうちの回答者（547名　集計率73%）で63%が「岩手大は第1志望だった」と回答している。センター試験の平均が下がり，（志願の）全国流動化のあった年にしては第1志望の割合は高かったと分析している。

2) 文部科学省「学校基本調査　速報」(2006)

3)「要約・実績・アピール」の評価をそれぞれ点数化したものの平均値で150点満点。選考は2名一組で行われ教職員が一緒になって面接を行った。